

## トロツトリーナとおおかみ イタリア

昔むかし、あるところに、トロツトリーナというまずい女の子がいました。トロツトリーナは、お母さんとふたりきりで暮らしていました。

あるとき、お母さんが病氣で寝こんでしました。食べる物がなくなつたので、トロツトリーナは、食べ物をもらいに町のお祭りに出かけていきました。木ぐつがこわれたので、はだしで歩いていきました。

とちゅうで、一軒の小屋の側を通ると、小屋の中から、

「どこへ行くんだい、トロツトリーナ」と、声がしました。

「お祭りに行くの。病氣のお母さんのためにパンをもらいに行くの」

しばらくして、トロツトリーナは、お祭りでもらつたパンのかけらと少しのケーキをかごに入れてもどつてきました。小屋の側まで来ると、またあの声がしました。

「パンとケーキはおれに持つてくれたのかね、トロツトリーナ」

「ちがうわ。病氣のお母さんにあげるの」

「どの道を行くんだい」

「石ころ道。わたしはくつをはいていないから、とげの道はちくちくするんだもの」

「そいつは、けつこう」

トロツトリーナが行つてしまふと、小屋の中からおおかみが出てきました。おおかみは、とげの道をぴょんぴょんかけていって、先回りして、トロツトリーナの家の戸をたたきました。お母さんが、

「だれだい」とたずねました。おおかみが、

「わたしよ。トロツトリーナよ」というと、お母さんは、

「じやあ、起きようかね」といつて、戸を開けました。おおかみは家の中に飛びこむと、お母さんをつかまえて、大きな口の中にぼーんと放りこんでしまいました。そして、お母さんのショールをはおり、お母さんのめがねをかけて、お母さんのベッドに入り、ふとんをかぶつてねっていました。

やがて、トロツトリーナが帰つてきました。トロツトリーナは、

「お母さん、パンとケーキをもらつてきたわ」といいましたが、すぐに、ベッドでねているのがおおかみだと分かりました。

「お母さんは、こんなにきたなくはなかつたわ。どうしてお母さんのめがねをかけているの」

「おまえをもつとよく見るためだよ」

「どうしてお母さんのショールをかけているの」

「寒いからだよ」

おおかみはとび起きて、トロツトリーナをつかまえました。

「ベッドにおいて、おまえを食べてやる」

「行かない。おしつこが出そうなの。下へ行つてしてくる」

「だめだ。ここでするんだ」

「いやよ。ここじゃできない」

そこで、おおかみは、トロツトリーナをかごに入れて、つなで地下室に下ろしました。トロツトリーナは、かごから出ると、小さなろばを自分の代わりにかごに乗せました。

しばらくすると、おおかみが、

「まだかい。トロツトリーナ」とききました。

「いいわ。引きあげてちょうどだい」

「おや、なんて重いんだろう。何を食べたんだね」

ろばを乗せたかごは上がっていました。トロツトリーナは、大急ぎで外へ出ると、畑にむかって逃げだしました。そのとき、おおかみがまどから顔を出していいました。

「トロツトリーナ、トロツトリーナ、

三時におまえをつかまえる」

「おおかみ、おおかみ、そうはいかない」

畑では、トロツトリーナのおばさんが仕事をしていました。

「ああ、おばさん。おおかみが来て、お母さんを食べてしまつたの。わたしをかくしてちようだい」

そういうて、トロツトリーナは、おばさんの大きなスカートの中にすっぽりかくれました。

そこへ、おおかみが来て、

「トロツトリーナを見なかつたかい」と、おばさんにたずねました。おばさんは、答えました。

「ああ見たよ。あつちのがけの上に、お母さんをさがしに行つたよ」

おおかみは、走つていつてがけの上からのぞきこみました。そのとき、おばさんが、おおかみをぽーんとつき落としました。トロツトリーナは、おばさんのスカートから出でくると、石をひろつておおかみの上に投げました。おおかみは死んでしまいましたとさ。

上を向いて、下を向いて、「らん

わたしのおはなしは、これでおしまい。